

23. 緑星の里歯科診療所における開設以来10年間の診療状況について

○井上 真希*, 道谷 弘之**, **, 森谷 恵*, 伊藤 昭文**, 川越俊太郎**, 山本 圭子**
萩野 司**, 内田 暢彦**, 江上 史倫**, 金澤 正昭**, 五十嵐清治***

(*北海道医療大学歯学部附属病院緑星の里歯科診療所・**北海道医療大学歯学部口腔外科学第1講座・
***北海道医療大学歯学部小児歯科学講座)

本学歯学部附属病院のサテライト診療所である緑星の里歯科診療所は、複数の知的障害者施設、特別養護老人ホーム、老人保健施設などを擁する社会福祉法人「緑星の里」の施設群の近傍に平成2年8月に開設され、これらの施設の利用者の歯科医療行ってきた。そこで今回、開設以来10年間の緑星の里歯科診療所における診療状況について検討を行ったので、その概要を報告する。

対象施設には、知的障害者施設が5施設、特別養護老人ホーム、老人保健施設があり、これらの定員は、合計約460名であった。平成2年8月から平成12年8月までの10年間は、診療実日数1,625日、のべ受診患者数24,051人で、1日平均受診患者数は、14.8人であった。この間に訪れた患者は約570名、1人平均受診回数は約42回で、そのうち知的障害者は半数以上を占め、要介護高齢者が3割弱であった。

知的障害者の伴う障害では、精神発達遅滞が9割以上

を占め、その他、てんかん、脳性麻痺、Down症候群、自閉症がみられ、健常者と同様の治療が可能であった患者、治療に際しレストレイナーなどによる身体の拘束や開口器を必要とした患者、全身麻酔下の歯科治療を余儀なくされた患者があった。要介護高齢者では、脳血管障害、心血管系疾患、老人性痴呆症などの基礎疾患が多く、複数の疾患を伴っている例が多かった。治療内容では、抜歯などの口腔外科的処置、保存処置、補綴処置の全般にわたっていたが、口腔外科的処置、補綴処置は、近年減少する傾向がみられた。とくに知的障害者では、当初齶蝕などの歯科疾患が多く見られ、これらの治療が主体であったが、近年では治療が進み、口腔環境の維持・管理と、ブラッシング指導が主体となってきた。これらの患者の歯科医療においては、施設との連携・協力が不可欠と思われた。

24. 小児の両側下顎第一小臼歯に認められた含歯性嚢胞の一例

○山本 圭子, 武藤 壽考, 川上 譲治, 辻 祥之, 金澤 正昭, 小西 慶克*,
斉藤 正人**, 五十嵐清治**, 賀来 亨***, 大内 知之***

(北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座・*幌向ファミリー歯科・
小児歯科学講座・*口腔病理学講座)

【目的】小児の含歯性嚢胞は臨床的にそのほとんどが下顎の第二乳臼歯とその後続永久歯である第二小臼歯にかかわる嚢胞であるといわれている。この度我々は、下顎第一小臼歯の含歯性嚢胞でなおかつ両側性に認めた、比較的稀な一例を経験したのでその概要を報告する。

【症例】10歳男児。H11年に近医にて左側下顎第一乳臼歯と両側下顎第二乳臼歯部歯髓処置を受け、その後、自覚症状なく経過していたが、H13年8月2日両側下顎乳臼歯の動揺のため、近医を受診した。その際、右側下顎第二乳臼歯の頰側歯肉に切開をうけ、さら、両側下顎乳臼歯部に、X線透過像を認めた為、当科を紹介受診した。

【経過および考察】平成13年9月10日、局所麻酔下に動揺著明な両側下顎第一、第二乳臼歯抜去し、肉芽様、一部嚢胞様の組織を認めた。これを除去すると、両側下顎

第一小臼歯の歯冠の露出を認めたため、開放創とし手術を終了した。現在、術後5カ月で、順調に萌出している。剝離除去した軟組織の病理組織所見は、結合織に慢性の炎症細胞浸潤が存在する、平坦な重層扁平上皮の裏層を、左右同様に認めた。裏層上皮では、その基底層側に、歯原性を思わせる、極性を持つ細胞配列を、また、歯原性上皮の小塊が、結合織中に散在していた。これらの臨床所見、病理所見から、両側下顎第一小臼歯を原因とする含歯性嚢胞と診断した。

小児に見られる乳臼歯部の嚢胞の場合、これまでの報告では小児の含歯性嚢胞の原因歯としては第二小臼歯が多いとされている。これは他の部位と比較し、先行乳臼歯のう蝕罹患率が高い事と、後続永久歯歯胚が乳歯に近接している為、先行乳歯の影響を受けやすく発生しやすい